

しあわせ犬

けん

池田眞也

20190825

)

## 『しあわせ犬』 登場人物

曾我部遥(通称ミルク)(20) 東京一年生。雑貨店店員

深町(山下)南帆(30) ラジオパーソナリティ

後藤恵梨香(27)劇団員。雑貨店店員

小川友明(22) 雑貨店の清掃員。新海の先輩。

峰岸牧夫(30) レンタル店の店員

広池耕介(30) 南帆の幼なじみ

高島佑一(30) 恵梨香の恋人、牧夫の友人

深町由美(25) レンタル店の客

新海雅也(20) 遥の同級生

石神香乃(23) 新海の恋人

クミコ店長(35) 雑貨店「クミコハウス」店長

山下和正(故人) 南帆の亡くなった夫

前園輝史(27) FM放送局「MUSASHI」ディレクター兼構成作家

三上佐和子(35) クレイマー

三上麗愛(うるあ) (5) 佐和子の娘

ウエダマリコ(25) ミュージシャン

ハラダ アパートの大家、劇団員、サッカー部員、FM放送局「MUSASHI」重役などいろいろな顔を持つ男。実は犬婆のアシスタントの妖精。

犬婆 しあわせ犬を連れて老婆。何をしている人なのか誰も知らない。実は町を見守る魔女。

モク しあわせ犬

\* \* \* \*

曾我部千鶴(45) 遙の母親

沢村憲明(30)南帆の学生時代の友達

真鍋由香里(30)南帆の学生時代の友達

柏原光男(30)南帆の学生時代の友達

竹内司(30)南帆の学生時代の友達

相沢恵子(30)南帆の学生時代の友達

雑貨店の常連客

サッカー部員A

サッカー部員B

一年生

古内亜紀 クミコハウスの店員

店員B クミコハウスの店員

FM放送局「MUSASHI」AD

FM放送局「MUSASHI」技術スタッフ

『しあわせ犬』

池田眞也

# スーパー(黒バック)「東京都に限りなく近い、埼玉県のとある街で」

# 1 道

犬婆としあわせ犬。  
とことこ歩いていく。

# 2 原田荘、前の道

竹ぼうきで掃除をしているハラダ。  
犬婆としあわせ犬が通りかかる。  
二人目と目が合い軽く会釈。  
去っていく犬婆、後ろ姿を見送るハラダ。  
ハラダ、建物の中に入っていく。

# 3 原田荘 203号室

六畳間に荷造りされた段ボールたち。  
小川友明、荷物にガムテープを貼ったりして引っ越しの準備を  
している。  
ノックの音。

ハラダ「入るぞ」

大家のハラダが入ってくる。

ハラダ「よお」

友明「あ、どうも」

友明、作業をやめてハラダのもとにくる。

友明「今までお世話になりました」

ポケットから部屋の鍵を二つ渡す。

ハラダ「次はどの街に住むんだよ」

友明「実は駅の裏側なんです」

ハラダ「だったら引越す必要ねえじゃねえか」

友明「ここより一部屋多いんですよ。同じ家賃で」

ハラダ「頭にくるやつめ」

友明「すみません。……この部屋に入る人、もう決まったんですか」

ハラダ「ああ。女の子だよ。えらい田舎から出てくるんだ。……何県だった

っけなあ。……出てこない。イニシャルがPの県だよ」

友明「P県なんてありましたっけ」

ハラダ「あつたじゃねえか。言われれば『ああ!』って思い出すんだよ」

友明「どのあたりですか?」

ハラダ「北だったか、南だったか……東だったか西だったか……忘れちゃ

ったよ。まったく猫も杓子も。そんなに都会がいいかねえ」

友明「やっぱり東京じゃないと出来ないことってあるんすよ」

ハラダ「埼玉だっつーの」

友明「……それでもこの部屋は俺にとって一番最初の東京でした」

柱の落書きをみつける。

ハラダ「……(読む)『ガンバレ日本、ガンバレ俺』……だつてさこんなの書い

てんじゃねえよ。バカ」

柱に書かれた落書き。「ガンバレ日本、ガンバレ俺」

F・O

#### #4 同

F・I

柱に書かれた落書き。「ガンバレ日本、ガンバレ俺」。

部屋中に置かれたダンボール箱。曾我部遥(通称ミルク)と母親

の曾我部千鶴が荷物の整理をしている。遥は強い遠視のため牛

乳瓶の底のような厚いメガネをしている。会話はP方言(架空の

街)が使われる。

ミルク「カーチャ、どべ、ごだつとるん?」

(ねえ、お母さん。まだ怒ってる?)

千鶴「だまるかさんが。ぐつちよも短大がり、入学させたど、るんでるさも、勝手に退学かるさんどら。

おまらひめ、内気かいなくちや、じんかる大胆なこと、しんたまわよっぱ

ば  
どこの誰に、似んでるん。

（当たり前でしょ。せっかく短大に入れたと思ったら、勝手に退学しちゃつてさ。あんた、内気なくせに時々大胆なことするわよね。どこの誰に似たんだか）

ミルク「もつかり田舎んどら、人生終わつとらんどるは、もかすまがめんこ。

自分さる隠れた才能、試さるんこら」

（やっぱり田舎で人生終わっちゃうのはもったいないかなくて。自分の隠れた才能を試したいっていうか……）

千鶴「けんだらぼつく遥はるかはるか）さる、何を、どうんこるん」

（結局遥はるかは何がしたいの？）

ミルク「住んでるこんちが、ゆるゆると探するんこら」

（それはこれから、ゆっくり探そうかなって）

千鶴「見つけだんとろす。本気どら夢を見ているどんすけさる、最初からや

りたいこと持ったんどんぺりこ。

だっこ、そんなもの見つか、ろっぱらんずるー、はっぴるわんこ」

（見つからないよ。本気で夢を見てる人は、最初からやりたいものを持つてるの。それにそんなものは、見つからないほうが幸せなの）

ミルク「カーチャ、ねがいすき、ごだつとろやめるんぺろ」

（お母さん、お願いだから怒らないでよ）

千鶴「だんごる、何をやっても、うまくろつぱらんず。ちやつこ田舎すこ、帰つてろんばら。ぺろ」

(……どうせ何やってもうまくいかないよ。すぐに田舎に帰つといで)

ミルクおそるおそるやつてきて、千鶴に背中から抱き着く。

ミルク「カーチャ……カーチャ……」

千鶴「ばんこわんか」

(……お馬鹿ちゃん)

#5 同

夜。並べられた布団に寝ているミルクと千鶴

ミルク「カーチャ、明日はターキヤ見物どうるんぺり」

(お母さん、明日は東京見物しようね)

千鶴「カーチャ、赤んぼさこP県から出んどうるんず。ターキヤがどんな街か、べりーべりーわくわくんぺら」

(お母さん、いままで生まれてからP県から出たことがなかったから、東京がどんな街かすごく楽しみだよ)

ミルク「カーチャが行きたいところ行かんどうるんぺり。どこに行かんでるん？ グーグルマップがどんぺりこ、どこにでも行けるんぺら」

(お母さんの行きたい所に行こうね。どこに行きたい？。グーグルマップがあるからどこにでも行けるよ)

千鶴「さだねえ、うでーば、さかいとろー、こばけぎ、うさけそ、がんじ……せびろ、とんかつ、だきまくら……いたばし、じゅうじよう、あかばね」

(そうだね、お台場、スカイツリー、歌舞伎座、浅草、銀座……渋谷、新宿、池袋、……板橋、十条、赤羽)

眠ってしまったミルク。

千鶴、気づき、ミルクの寝顔を見る。  
やさしい表情。

千鶴「うめやけ」

(アメ横)

ミルクのおでこにキスをする。

# 6 東京

千鶴とミルク。腕を組んで笑いながら楽しそうに歩いていく。

千鶴のVO「心配そうに）遙、本当がり、どくりんご、生きてろっばらるん？」

(遙、本当に、独りで、生きていけるの?)

千鶴のVO「行かないでと懇願するように）遙、本当がり、どくりんご、生きてろっばらるん？」

千鶴のVO「半ば取り乱して）遙、本当がり、どくりんご、生きてろっばらるん？」

# 7 東京駅

手を振って別れる母と娘。

キャリーバッグを引いて去っていく千鶴。

# 8 原田荘  
203号室

すっかりきれいになった部屋。

ラジオから流れてくる南帆の声。

遙、机に座っている。写真たてを手にとって見る。高校の同級

生新海拓也を隠し撮りしたもの。

ミルク「しん、かい、くん……ガンバレ日本、ガンバレわたし」

柱の落書き。「ガンバレ日本、ガンバレ俺」

# 9 レンタル店

店員の峰岸牧夫(彼はいつもジャージを着ている)が店内をチェックしている。「ホラー」の棚に『1999年の夏休み』のDVDを見つめる。手に取り「名作」の棚に移す。

牧夫「……！」



柵のすきまから深町由美をみつめる。

牧夫、由美をこっそり見つめる。

由美の横顔。

由美、歩き出す。

牧夫が後を追い話しかけようとしたとき、誰かが牧夫の背中を叩く。

佐和子「ちよつと、あんた」

牧夫、振り返ると小さな娘を連れた女性が立っている。クレイマーで有名な三上佐和子だ。

牧夫「いらつしやいませ、またのお越しを」

牧夫、逃げようとするが、佐和子が袖をつかむ。

佐和子「なにあたしから逃げようとしてんのよ」

牧夫「どうかいたしましたか？」

佐和子「なんで『たまこまーけつと』の5がないのよ」

牧夫『たまこまーけつと』でしたらむこうのアニメのコーナーにあるはずですが」

佐和子「見たわよ。貸し出し中になってるでしょ。4も6もあるのに5がないなんてありえないでしょ」

牧夫「それでしたらまた後日……」

佐和子「人気ある作品でしょ。もつと大量に入荷しなさいよ。あたしは夜遅くまで働いてるのよ。休みは貴重なの。子どもと一緒にDVD見られる時間も限られてるの。なんでそんなことさえてできないの？ あたしが子どもとアニメ観ちゃいけないっていうの。疲れて帰ってきててもDVD観る権利もないの？」

牧夫「そういうわけじゃ……」

佐和子「3、4と今週観たからどう考えても次は5でしょ。先週あたしが借りたときから次はそれを借りるってちよつと考えたらわかるよね。それともこの店は客の気持なんか全然考えてないわけ？」

牧夫「お客さん。ちよつとねえ、あなたを中心に世界がまわって……」  
麗愛と目が合う。切なそうに牧夫をみつめる。

牧夫「……すみません」

佐和子「あんた今逆切れしたよね。そういう態度が許されるんだ、この店では。」

お客様をなんだと思ってるの？」

牧夫「申し訳ありませんでした」

佐和子「本当に反省しているんだったら誠意示さないよ」

由美が遮る。

由美「あのすみません。ちょっといいですか？」

牧夫「はい」

由美「教えていただきたいんですが」

牧夫「はい、少々お待ちください。（佐和子に）その点は上のものと相談して

善処いたしますので。（由美に）どうなさいました？」

牧夫、助かったという表情で佐和子から離れる。

由美「（小声で）大丈夫でしたか？」

牧夫「すみません。助かりました」

由美「あの人有名なんです。いろんなところでトラブってる」

牧夫「あ、どうでした？ 『関の弥太っぺ』」

由美「ぼろ泣きです。古い日本映画がこんなに面白いなんて思わなかったです」

牧夫「いい作品いっぱいありますよ。フランス映画とか観ますか？」

由美「観たいです。泣ける映画ありますか？」

一緒に棚に移動する。

牧夫「古いヨーロッパの映画なんですけれど、小さなクリーニング店を営む四十歳ぐらいの女が主人公で、美人だから男から人気がある。なにかと助けてくれるボーイフレンドも男もいて、何度も求婚されているのだけれど、どうしても結婚に踏み切れない。彼女は十年以上に失踪した夫の帰りをずっと待ち続けていたんです。夫は深く自分を愛してくれていた。ほかの女の気配やトラブルもなく幸せな結婚生活を送っていた。しかしある日突然なんの前触れもなく夫は姿を消した。しかしついにちよつとした手掛かりがきっかけで夫の居場所を突き止めるんです。夫は、大きな秘密を抱えていたんです。……」

# 10 ファミリー・レストラン

向かい合って座っている牧夫と後藤恵梨香。

牧夫「でも後からさ、一人でベラベラしゃべりすぎちゃったなって、チョー自己嫌悪。絶対引いてるよね」

恵梨香「大丈夫だって！」

恵梨香、牧夫の手を握る。

恵梨香「次に来たときなんか言っていた？」

牧夫『めっちゃ感動しました。私この映画大好きです』だって」

恵梨香「じゃあいいじゃん」

牧夫「それで『これはどうですか？』って『かくも長き不在』を勧めたんだよ」

恵梨香「……知らない」

牧夫「60年代のフランス映画なんだけど……」

恵梨香「(さえぎって)その話はまた今度」

牧夫「……」

恵梨香「本当に引いてたら、南口の店に変えちゃうだろうし、だいいち二度と話しかけてこないって」

牧夫「そうかな」

恵梨香、大きくなづく。

恵梨香「マキオくん……」

牧夫「……なんででしょう」

恵梨香「行くしかない」

牧夫「行く？」

恵梨香「誘うの」

牧夫「誘う？」

恵梨香「ほんと……」

牧夫「ボクと……」

恵梨香「いっしょに……」

牧夫「いっしょに……」

恵梨香「映画に行きませんか」

牧夫「……ムリ。ぜったい無理」

恵梨香「なんでよ」

牧夫「俺チキンハートだからさ」

恵梨香「(馬鹿にするように)繊細な心が粉々になる」

牧夫「なる」

恵梨香「二度と立ち直れないって寝込んじゃう」

牧夫「寝込む」

恵梨香「たとえそうなくても……誰一人として困らない」

牧夫「……」

吹き出す恵梨香。

吹き出す牧夫。

笑う二人。

入り口を見る恵梨香。気づく。手を振る。

スーツ姿の高島佑一がやってくる。

佑一「悪い、遅くなって」

牧夫「よお」

佑一「なににお前？ レンタル屋の客に恋してるんだって？」

牧夫「なんで知ってたよ」

恵梨香、奥のシートにずれて場所を作る。佑一、恵梨香の隣に

座る。

佑一、身を乗り出して牧夫の話を聞きにくる。

佑一「で？」

牧夫「……恵梨ちゃん！」

恵梨香「ごめーん！ でも佑一には隠せないよ」

# 11 FM放送局「MUSASHI」、スタジオ

ブースの中で喋っている深町南帆。

南帆の前にはディレクター兼構成作家の前園。ブースの外には

ADとミキサー。

南帆『深町南帆の唇どろぼう』今日が明日になるまでの一時間、深町南帆と一緒に最後まで楽しんでください。ラジオネーム、チュンセポウセさん。いつもいつも素敵なメールありがとうございます。チュンセポウセさんは私が新人の頃からずっとリスナーでいてくれますよね。顔も名前も知らないけれどずっと昔からの友達のような気がしています。いつかじっくりお話ししたいですね。それでは紹介します。『南帆さんこんばんは』こんばんは……』

スタジオの隅に座っている和正の亡霊。南帆を見つめている。

## # 12 高台の広場

南帆を中心に七名の男女が集まっている。広池をはじめ沢村憲明、真鍋由香里、柏原光男、竹内司、相沢恵子。全員が喪服姿。

南帆や和正の学生時代からの仲間だ。

亡くなった南帆の夫で皆の学生時代からの仲間、和正を偲ぶ儀式の準備をしている。

テーブルを並べたり、食事を用意したり準備が進められている。

広池は石を集めて写真台を作り、和正の遺影を置く。

\* \* \* \* \*

皆の前で挨拶をする南帆。

その後ろに白い服を着た和正の亡霊が立っている。

南帆「一緒に暮らしたのが三年。向こうの世界に逝ってしまつて三年。皆さんの思い出があるけれど、病気と正面から向き合つて、闘つてるときに彼が一番好きだった。体がよくなつたら、あれがしたい、ここに行きたい、つて二人でたくさん話して、希望は一つも叶わなかったけれど、二人で同じことに想像をめぐらすのは本当に楽しかった。きっと彼は今このあたりにして、みんなが集まってくれたことを喜んでいると思う。今日は本当にありがとう」

\* \* \* \* \*

沢村「和正を偲んで、献杯！」  
けんぱい

\* \* \* \*

ビールや食事とともに学生時代の昔話が弾む。  
喪服姿で盛り上がる面々。

南帆も笑っている。

広池だけひとり離れて景色を見ている。

柏原「たまにはめでたい席で集まろうぜ」

沢村「次は誰の番だよ」

由香里「なんで私を見るのよ」

沢村「じゃあ広池か？」

恵子「いまの彼女と結構長いよね」

由香里「広池って昔から絶対彼女紹介しないよね。誰か会ったことある人いる？」

だれもない。

柏原「彼女の写真とか一度も見せてくれないよな」

南帆「そういうの嫌いみたいだね。他人にさらすの」

竹内「前から思ってたんだけどさあ……広池の彼女って本当にいるの？」

沢村「え？ 嘘ついてるってこと？ そんなことして意味あるのか。だいた  
いあいつの話リアルすぎるぞ」

恵子「(竹内に)それ失礼。広池って意外に女子から人気あったよねえ」

南帆「正直だけが取り柄だから」

由香里「あーあ、女子で売れ残ってるの私だけか」

恵子「結婚なんていいことばかりじゃないよ」

沢村「俺はもうこりこりだな」

由香里「南帆は？ もういいでしょ。和正くんも許してくれるって」

南帆「私はいいよ」

柏原「もてるんだろ。新しい彼氏とかいないのかよ」

南帆「……もてないよ」

\* \* \* \*

盛り上がっている一同。

一人でいる広池のところへ南帆がやってくる。

南帆「広池……食べるものなくなっちゃうよ」

広池「和正くんって中等部からじゃない」

南帆「私、高等部からしか印象ないんだよね。一緒にクラスになったことなかったし」

広池「中一のころから170超えててき、見上げながら話してたんだけど、最初は怖かったよ。……いまだにわからないんだけど、なんで俺なんかと仲良くしてくれたんだろう」

沈黙。

南帆「……今日これから暇？」

広池「予定ないよ」

南帆「もうちよつとつきあつてよ」

広池、振り返ってうなづく。

### # 13 夜の街

酔いつぶれた南帆を広池がおぶって歩く。

その後ろを和正の亡霊が歩く。

犬婆と幸せ犬とすれ違う。

広池「こんにちは」

幸せ犬に触って去っていく。

和正が犬婆に会釈をする。犬婆も会釈を返す。

### # 14 雑貨店「クミコハウス」

全景や店内。

クミコのテーマに乗せてクミコハウスの紹介。

クミコの声「街の真ん中にそびえているのはクミコの山。その頂上にクミコの

お店、クミコハウスがあります」

等身大のパネル。

クミコの声「素敵がいっぱい、夢いっぱい。みんな大好きクミコハウス」

ディゾルブで実物のクミコ登場。

クミコ店長「みなさん、私のお店にようこそ。生活雑貨から家電用品まで、おしやれなものや便利なものがいっぱい。ほしいものが何でも揃いま

す。(花を一凜手に取って)こんなかわいいものまで。(置く)

とつても楽しいクミコハウス。お店の中で守ってほしいことは次の三つ。タバコを吸わないこと。飲んだり食べたりしないこと。そしてバナナの皮を捨てないこと。営業時間は九時から九時まで。皆さんお待ちしています。お客様を迎えるクミコの仲間たちはこちら」

クミコハウスのスタッフたちが現れる。

クミコ店長の号令にあわせ店員の恵梨香と古内亜紀、店員Bが掛け声をかけている。

店の隅に履歴書を持ったミルクが立っている。

クミコ店長「いらっしやいませ」

店員たち「いらっしやいませ」

クミコ店長「ありがとうございました」

店員たち「ありがとうございました」

クミコ店長「またのお越しをお待ちしています」

店員たち「またのお越しをお待ちしています」

クミコ店長「お客様は神様です」

店員たち「お客様は神様です」

クミコ店長「なまむぎ、なまごめ、なまたまご」

店員たち「なまむぎ、なまごめ、なまたまご」

クミコ店長「大切なのは……」

店員たち「スマイル！」

全員笑う。花瓶にクミコの笑顔が映る。

夜勤を終えた清掃員・友明がミルクとすれ違う。

友明「お疲れッス」

ミルク「あ、……おつかれさまでした」

クミコ店長「ごきげんよう。また明日」

店員たち「ごきげんよう。また明日」

去っていく友明。



# 16 レンタル店

由美が牧夫を見つけると手招きをする。  
よろこんで由美のもとに駆け寄る牧夫。

# タイトル「しあわせ犬」

# 17 雑貨店「クミコハウス」、売り場

レジに立っているミルク。客の対応をしている。  
バーコードリーダーが 反応しない。  
レジの後ろにはものすごい行列ができている。客の中にはバナナを食べている原田がいる。

ミルク、何度も何度もバーコードに当てる。くりかえすうちに突然レジが反応する。猛烈な勢いで数字が動き出す。

ミルク「す、すみません」

どうしていいかわからないミルク。  
行列の客たちは「早くしろ」と叫び始める。その声徐々に大きくなりデモ隊のような状態になる。  
バナナを食べ終わったハラダ、皮を捨てる。  
先輩店員、恵梨香がレジに入ってくる。

恵梨香「どいて」

エスケイプ・キーを押してレジを黙らせる。

恵梨香「お待たせしました。いつもありがとうございます」

笑顔を振りまきながら、てきぱき処理を終わらせていく恵梨香。  
見とれるミルク。

恵梨香「(ミルクにしか聞こえない声で)袋に詰める」

あわてて袋詰めをするミルク。

ミルク「……(騒いでいる人々を見る)」

恵梨香(遥に小声で)「ぼやぼやしてないで、説明してきなさいよ。すぐに終わりますって」

ミルク「あ、はい」

客のもとに走っていく遙。

恵梨香「(客に愛想よく)いらっしやいませ」

ミルク、バナナの皮に滑って転ぶ。そのまま客の列に突っ込み、ドミノの倒しで次々と客たちが倒れていく。

恵梨香「ありがとうございます。……(ミルクを見て舌打ち)ったく」

次の客が来る。対処する恵梨香。

# 18 欠番

# 19 居酒屋の前の道・夜

駅近く。店の前の路地に出されたテーブルでミルクと恵梨香がお酒と食事。

恵梨香「ハハハハ！(大笑い)あんたそれでこっち出てきたの？」

ミルク「だめですか？」

恵梨香「短大中退して、片思いの彼を追いかけてくるなんて、普通しないよね。

その前に告るでしょ」

ミルク「……みんなにも言われました」

恵梨香「なんでミルクって呼ばれてたの？」

ミルク「……こういうメガネしてるから。牛乳瓶」

恵梨香「ふうん、『はるか』『ミルク』。かわいいじゃん……(みつけて)あ！」

遠くに犬婆と犬が歩いている。

恵梨香、立ちあがり走り去る。

遠くからミルクを呼ぶ。

恵梨香「ミルクおいで」

恵梨香が去った方に走っていくミルク。

恵梨香を見つける。

犬婆としあわせ犬と一緒にいる。

ミルクも恵梨香のもとに走ってくる。犬婆に気づき、

ミルク「こんばんは」

犬婆「こんばんは」

恵梨香「このワンちゃん、『しあわせ犬』って呼ばれてて、このへんでは人気者

なの」

ミルク「しあわせ犬？」

恵梨香「さわると幸せになれるんだって」

犬 婆「ただの噂よ」

ミルク「恵梨香さん、幸せってなんですか？」

恵梨香「幸せって何か？……さあ……彼氏と仲直りしましたとか、……(考

え込んで)レッズが勝ちましたとか」

犬 婆「犬にさわったぐらいじゃ、幸せになんてなれないわよ」

恵梨香「ミルクもさわらせてもらいな」

ミルク「東京の犬は噛むって田舎では言われていたんですけど」

恵梨香「サイタマネ。噛まないよ」

ミルク、こわごわと近づいていく。

ミルク「かむなよ。かむなよ」

犬、ミルクの腕をがぶりと噛む。

ミルク「痛い！」

犬 婆「大丈夫」

ミルク「噛むじゃないですか。東京の犬」

恵梨香「だから東京じゃなくて埼玉ね」

犬 婆「ごめんなさいね。けがしなかった？」

## # 20 高校の校庭、放課後(回想)

サッカー部で活躍する新海。

ミルク、グラウンドの隅から彼を見つめながら絵を描いている。

スケッチブックにはすべて新海を描いた絵。

新海の蹴ったボールが、ミルクのところに転がってくる。

新海「ミルク、悪い。取って！」

ミルク、おどおどしながらボールを取る。

ボールを待つサッカー部員の視線をいつせいに集めるミルク。

ミルク、蹴り返そうと、ミニスカートにもかかわらず、足を高く上げて……空振り。しかも脱げた靴が飛んでいき、サッカー

部員ハラダの頭を直撃する。倒れる部員ハラダ。  
金縛りにあっているサッカー部員たち。

部員A「見たか？」

部員B「……あんなすごいパンツをはいてたのか……」

部員A「……はいていたのか……」

新海、ミルクの靴を拾い、笑いながらやってくる。

新海「お前さあ、内気なくせに、時々大胆なことするよな」

新海、ミルクに自分の肩を貸して椅子に座らせる。

新海、笑顔。うっとりするミルク。

倒れている部員ハラダを介抱していた一年生部員が助けを呼ぶ。

一年生「先輩！ 動きません！」

## #21 夜の街

歩くミルク。

新海からもらった年賀状を頼りに新海のマンションの前までやってくる。

新海の部屋に灯っている窓明かり。

見上げるミルク。

## #22 新海の部屋、中

写真立てには新海と香乃の写真。

ラジオから流れる南帆の番組。

会話は湿りがち。深刻な雰囲気。

新海「……そんなこと言われても、子どもなんて育てられるわけないじゃないですか……」

友明「香乃ちゃんの心や……体が……どれだけ傷つくか考えると……」

新海「彼女だって納得してくれましたよ。二人で何度も話し合って決めたことなんです」

友明「本当に香乃ちゃんはそれでいいのか？」

新海「来週……一緒に病院行ってきます」

再び沈黙。

友明「……それでも……もう一度考え直してみないか」

新海「友明には関係ないでしょ」

友明「……香乃ちゃんがかわいそうじゃないか」

香乃の写真。

バックに南帆のラジオ番組が流れる。

南帆の声「ここで一曲お届けします。ラジオネーム、チュンセポウセさんから  
のリンクエストでウエダマリコの『ひとりぐらし』」

★以下、ウエダマリコの曲がBGMで流れる。ウエダマリコの曲に合わせ  
てて人物は口ずさむ。

# 23 ひとりぐらし 1 河原

月を眺めているミルク。

月の中に千鶴の顔が浮かぶ。

ウエダマリコ「なかまはずれにされない場所をめざした 似ている人たちが集  
まる街」

# 23 ひとりぐらし 2 道

月を眺める友明。

ウエダマリコ「のりかえる駅ひとつ間違えて」

# 23 ひとりぐらし 3 新海の部屋

一人残された新海。

ウエダマリコ「自分の行き先がわからなくなった」

# 23 ひとりぐらし 4 佑一のオフィス

# 23 ひとりぐらし 5 恵梨香の部屋

独りで残業している佑一が恵梨香に電話をかける。

恵梨香と佑一のカットバック。

つかれた佑一にねぎらいの言葉をかける恵梨香。

ウエダマリコ「仕事ができなくて叱られたら 夜には誰かが誘ってくれる」

# 23 ひとりぐらし6 満員電車

会社帰りの由美。

ウエダマリコ「みんな気にかけてくれるよ でも本当は」

# 23 ひとりぐらし7 駅

ガラス窓に映る由美の姿。その後ろにハラダが四人立っている。四人のハラダ、声を合わせて歌う。

ウエダマリコ「あるく速さに ついていけないの」

# 23 ひとりぐらし8 同

電車を降りた広池。

ウエダマリコ「東京タワーの 光のヴェール」

# 23 ひとりぐらし9 スタジオ

曲の間ぼんやりしている南帆。

南帆を見つめている和正。

ウエダマリコ「眩しすぎて 涙溢れそう」

南帆、外を見る。

ウエダマリコ「うまれてはじめて 男の人に つよく抱きしめられた」

# 23 ひとりぐらし10 踏切

コンビニ袋を提げて、開くのを待つ牧夫。

ウエダマリコ「都会で出会った私たちは」

# 23 ひとりぐらし11 香乃の部屋

外を見ている香乃。

遠くに見える一軒家にあかりがともっている。

ウエダマリコ「おもったたよりもかっこ悪くて」

# 23 ひとりぐらし 12 佐和子の部屋

うるあを寝かしつけている佐和子。

ウエダマリコ「傷つきやすい寂しがり屋ばかり」

# 23 ひとりぐらし 13 ライブハウス

クミコが熱唱している。

クミコ「こんどの 長いやすみにもいなかに かえらない」

# 23 ひとりぐらし 14 道

犬婆と幸せ犬が歩いていく。

# 33 原田荘、ミルクの部屋

パソコンの画面を眺めるミルク。

ウエダマリコのライブ告知。

「チケット枚数」をクリックして「2枚」に。

ためらうミルク。

勇気を出して「購入する」をクリック。

パソコンの画面が変わる。「確定しました」の文字。

# 34 情景・月

# 35 FM放送局「MUSASHI」、会議室

南帆、ディレクター前園、担当重役（ハラダ）と三人で打ち合わせをしている。

重役の提案に前園と南帆顔を見合わせる。

# 36 欠番

# 37 街

嬉しそうに歩く南帆。

南帆の声「放送開始当初は一通のメールしかこなかった番組も、最近はずっと聴取率も好調とおほめの言葉をいただいたちゃった。そしてさらに大ニュース……」

# 38 遊歩道

メールを読む広池。

広池『くちびるどろぼう』が次回の改編で二十三時開始の一時番組から、二十二時開始の二時間番組に変更になります」

目の前には由美が歩いている。

由美「……」

広池『真っ先に君に教えてやったからな。光栄に思えよ』だって」

由美「……」

広池「すごいね。やったじゃん……ねえ？」

由美「……すごいね」

広池「……？」

由美「彼女とけんかしたんだって？」

広池「なんだよ。唐突に」

由美「合コンに行ったのがばれたんだって？」

広池「ああ……合コンぐらいいいじゃん。ねえ」

由美「前から思ってる事言ってもいい？」

広池「……」

由美「嘘でしょ」

広池「嘘って！ 沢村が主催なんだよ。沢村は知ってるだろ……」

由美「合コンに行ったことじゃなくて。彼女のこと。本当はそんな人いない

んでしょ」

広池「何いってんだよ」

由美「学生時代から、ずっと……お姉ちゃんのが好きなんでしょ」

広池「そんなことは……」



由美「ばればれ」

広池「ほかの人からそんなこと一度も……」

由美「私にはわかるの。きつさと告ればいいじゃん」

広池「……」

由美「だいたいお姉ちゃんも鈍感すぎ」

広池「深町はまだ和正くんのが好きなんだよ」

由美「……三年もたつんだよ。お姉ちゃんは、広池さんとだったら幸せになれると思う。なんで思いを伝えないの？」

広池「俺は……深町を幸せにできないよ」

由美「本人が幸せかどうかなんて男が決めることじゃないでしょ。なにうじうじしてんのよ。意気地なし」

広池「確かに勇気がないって言われたらその通りかもしれない。今の関係が壊れるのも怖いしね……学生時代からあの二人は理想の恋人だった。とてもしゃないけれど俺なんかが入り込める余地はなかったよ」

由美「……」

広池「無理やり奪い去るだけじゃなくて、相手が本当に望んでいるようにさせてあげる愛もあるんじゃないかな」

由美「(溜息)最近そんな映画見たよ。郵便配達をしている男には何年も思いを寄せている女性がいる。彼女は失踪した夫を待ち続けていて、夫の居場所がやっとわかって、彼女の元に帰ってくる直前に不慮の死を遂げてしまう。**郵便配達人**はそのことを知るけれど、妻は知らない。そこでどうしたと思う？ 男は夫になりすまして彼女に手紙を送り続けるの。消印も偽造して。『すべきことをやり終えたら君の元に戻る。いつも君のことを考えている。君を愛している』だって」

広池「そのほうが彼女は幸せだと思っただよ。そういうの嫌い？」

由美「嫌いじゃないけどさ……夫は死んだ。だから俺が幸せにしてやる。そっちのほうが絶対いいって」

# 39 公園

ベンチに座っている南帆と広池。広池は白いシャツを着ている。

広池は南帆に背を向けノートパソコンをいじっている。

二人はリラックスして心地よい沈黙を楽しんでいる。

葉っぱが風に揺られながら落ちてくる。広池のコップに入る。

広池気づかずに飲む。飲んで葉っぱが入っていることに気づく。

クスリと笑う南帆。

南帆「そのシャツってき、よく着てるよね」

広池「ん？ そうだね。気に入ってるかも」

南帆「なのになんでそんなにきれいな？ いつも真っ白じゃん」

広池「ああ！ 白いものは洗濯するときに湯で洗ってみ。劇的にかわるよ。

白じゃないものは色落ちするけどね」

南帆「へえ。今度やってみよう」

きれいな白いシャツ。

南帆「……」

広池の背中にもたれかかる。

広池「(笑って)なんだよ」

南帆「広池の背中気持ちよさそうだもん。だめ？」

広池「俺も一応男なんですけど」

南帆「大丈夫。君は紳士だから」

青い空。

南帆「……彼女と仲直りした？」

広池「……まだ怒ってるかな。会話とかきこちないね」

南帆「そりゃ怒るよ。SNSに女の子とのツーショット出したら。丁寧に

タグ付けまでされてるし」

フェイスブックの写真。飲み会での広池と女性になったハラダ

が腕を組んでいる。

広池「それに女の子のほうから腕組んできたんだぜ……最初から行きたくない

かったんだよな」

南帆「ずいぶん楽しそうにしてたじゃん……馬鹿だね」

広池「……馬鹿だね」

南帆「馬鹿馬鹿」

広池「馬鹿馬鹿」

南帆、遠くに佐和子と麗愛親子を見つめる。

仲良く遊ぶ親子。

南帆「……もしも結婚することが決まったら、一番最初に教えてよ。誰よりも祝福してあげるからね。その娘、離しちゃだめだよ」

#40 FM放送局「MUSASHI」、スタジオ

『深町南帆の唇どろぼう』の放送。

南帆『ことのは森』のコーナーです。

普段何気なく使っている言葉でも、隠された深い意味を持っていたり、リスナーのみなさんの個人的な思い入れのあるものなど、あなたの好きな言葉を紹介していきます。今日いただいたメールは住所不定、職業性別すべて不詳、チュンセ・ポウセさん。いつもありがとうございます。

(読む)『南帆さんこんばんは』こんばんは。『私が好きな言葉は、『さようなら』です。悲しいお別れの場面で用いることも多いですが、『さようなら』を文字で書くと漢字の『左』<sup>ひだり</sup>『様』<sup>さま</sup>とひらがなの『なら』ですよね。『左様』は『その通り』という意味じゃないですか。『あなたがその通りであるならば』つまり『いつかまた会えた時も、今のままの、変わらないあなたでいてください』そんな再会の約束の言葉だと思うのです。いかがですか？これは調べたわけではなく、本当にそうなのかはわかりません。私一人がそう思っているだけかもしれません。』

なるほど……そんな風に考えたことはなかったな。この言葉には、きっとたくさんの人の涙が宿っているんでしょうね。私ももちろん、いままで生きてきて大切な人との別れを経験したこともあります。きっとみなさんもそうでしょうけれど『私のさようなら』を思い出すたびに、今でも胸が苦しくて、切なくて、それでいてどこか温かい、どこかやさしい。『さようなら』ってそんな言葉ですよ。

チュンセ・ポウセさんありがとうございます。ではそろそろお別れの時間がやってきました。番組からプレゼントがあります。次週の放送で、

おたよりを紹介した方全員に、なんと『ウエダマリコ』のライブのチケットをプレゼントします。全員ですよ。すごいでしょ。だから放送で読んだりしないから、匿名希望の人も必ず住所と名前を書いてくださいね。とくにチュンセポウセさん。

『深町南帆の唇どろぼう』今日が明日になるまでの一時間、みなさんと一緒に過ごすことができ、幸せでした。今夜はいつもと違う言葉を贈ります。

『みなさん、さようなら。』

#### #41 レンタル店

牧夫と由美が棚でDVDを探している。

牧夫「ロマンティック・コメディの金字塔だったらなんといつても『アパー

トの鍵貸します』ではないかと……」

由美『あ』ですか……（「あ」の棚を探す）『アパートの鍵貸します』……」

牧夫「……あ、あの……ぼくと……映画でもいきませんか……」

由美、探していたDVDを見つける。

由美「ありました。『アパートの鍵貸します』……え？『僕と映画でもいき

ませんか』？ じゃあ、『ほ』ですね……『僕と映画でもいきませんか』

牧夫「そうじゃなくて……」

由美「え？……まじですか？」

牧夫「まじです」

由美「……」

牧夫「まじです」

由美、爆笑。

牧夫「……」

由美「いいですよ」

牧夫「……まじですか？」

由美「まじですよ」

見つめあうふたり。

#### #42 田園地帯

を歩く牧夫、恵梨香、佑一。祝福している。

#43 クミコハウス 店内

麗愛が店内を走る。転ぶ。

ミルクがみつけて駆け寄る。麗愛にやさしく微笑む。

ミルク「大丈夫か？」

麗愛「……」

\* \* \*

激怒する佐和子。（世界に憎しみを抱いていて、それをぶつけているのだ）

平謝りするクミコ店長。

そのうしろには向かっていこうとするミルク。店員・亜紀と店員Bが押さえつけている。

クミコ店長の後ろから怒り心頭のミルクが顔を出す。クミコ店長の髪の毛をひっぱったりする。

佐和子「子供が大怪我したらどう責任を取るつもり。顔に傷を負ったりしたら結婚できなくなるかもしれないのよ。こんな店に賠償金とかはらえるの？」

クミコ店長「お客様の安全には今後も一層注意してまいりますので」

佐和子「店員もサイアク。店長の教育が悪いからガラの悪い接客しかできないのよ。あなたもそう思わない？」

クミコ店長「お客様のおっしゃる通りです。私自身さらに勉強をいく所存です」  
佐和子「あっちの人はまだなにか言いたそうねえ」

クミコ店長「そんなことはございません。本人も心の底から反省しております。……ねえ？」

クミコ店長と店員たち、力づくでミルクに頭を下げさせる。  
ミルクの頭をつかみながら。

亜紀（腹話術で）「本当に申し訳ありませんでした。このようなことは二度としません」

佐和子「どうせ心の中で舌出しているんでしょ」

亜紀(腹話術で)「海よりも深く反省しております」

一人でレジ打ちをしている恵梨香。

ミルクたちを見る。

客のカップルが佐和子を見て笑う。

カップル女「あのおばさん、また叫んでるよ」

カップル男「あのパワー電気とか起こせるんじゃないの」

カップル男、佐和子にスマホを向ける。

叫び続ける佐和子。

画面が動画投稿サイトが変わる。

#### # 43 B 店の外

佐和子と麗愛が振り返る。

クミコ、亜紀、店員Bニコニコしながら見送る。

一人だけ不機嫌なミルク。

前列中央にクミコ、後列は真ん中にミルク、その脇に亜紀と店員Bが立つ。

ミルクの両腕は脇にたつ店員とひもで縛られている。

クミコ店長「またのお越しを心よりお待ちしております」

亜紀・店員B「またのお越しを心よりお待ちしております」

クミコ手を振る。

亜紀と店員Bも手を振る。ミルクの両腕も持ち上がり左右に揺れる。

クミコ店長「またのお越しを心よりお待ちしております」

亜紀・店員B「またのお越しを心よりお待ちしております」

クミコ店長「またのお越しを心よりお待ちしております」

ニコニコするクミコ店長。

麗愛が手を振る。

#### # 44 雑貨店「クミコハウス」、従業員控え室

クミコ店長、ミルクに壁どん。怒鳴りつける。

クミコ店長「なに、さっきの態度は！ お客様に意見するなんてあんた何様のつもり！」

ミルク「だって……」

クミコ店長「仕事もろくにできないくせに十年早いのに！」

ミルク「……でも」

クミコ店長「さんざん苦労して、やっと持てたお店なの。あなたみたいな小娘に私のお城をめちやくちやにされたくないの」

ミルク「……私はただ……」

クミコ店長「この店つぶされる前に、アタシがアンタを潰してやるわよ！」

#45 同

倉庫と休憩室、作業室を兼ねた部屋。いくつか机がある。

ミルク、ふくれつつらで自分専用の（と勝手に決めた）机に座ってPOP広告を制作している。赤、オレンジ、ピンクの台紙に手の込んだイラスト。まるで芸術品。

恵梨香が入ってきて、ミルクに声をかける。

恵梨香「ミルク」

答えないミルク。

ミルクの座っている机にはぬいぐるみ、プリクラ、イラストなど、殺風景な控え室の中で、そこだけが不夜城のように華やかに飾られている。

恵梨香「このデスクはいつの間にか、キミだけの物になってしまったねえ。誰の許可もなく。……ミルクってき、内気なくせに大胆なところあるよね」

ミルク「……」

恵梨香「ミルク、笑ってよ。あんた、あたしがなんて言えば笑う？」

といいながらミルクの制作したPOP広告を手に取り、

恵梨香「……!!」

ミルク「店長も、あんな言い方しなくてもいいじゃないですか」

恵梨香「あのね……」

ミルク「クレマーにペコペコするなんておかしいですよ。お金を払う人って

そんなに偉いんですか」

恵梨香「ちよつと……」

ミルク「あんな他人に迷惑かけるような人、来ないほうがお店のためですよ！」

恵梨香「ミルク！ 一分間だけあたしの話聞いて」

ミルク「……」

恵梨香「あなたの今描いてるPOPだけど……秋用なんだ。最初に説明したよ

ね。夏用は、こつち」

恵梨香「七月、八月」と表に書かれた、青、緑、黄緑などの台

紙の入った袋を出す。

ミルク、自分の机に置かれた袋の表を見る。「十月、十一月」と

書かれている。

恵梨香「……やり直して」

ミルク「これ全部ですか？ こんなに一生懸命描いたのに、全部やり直すんで

すか？」

恵梨香(静かに、優しく、そして毅然と)「そう、全部。……使えないの。使っ

ては、いけないの」

ミルク「……ごめんなさい」

ミルク、しくしく泣きだす。

恵梨香、ミルクのメガネをはずす。

恵梨香「ねえ、ミルク。コンタクトにしまよ。あんた自分で思っているより、

ずつとかわいい顔してるんだよ」

ミルク「どうせ私のことなんか、誰も好きになつてくれませんよ」

恵梨香「あたしがいるじゃん……ね」

## # 46 店の全景 夜

### # 47 雑貨店「クミコハウス」、従業員控え室、店内

清掃員の友明、モップがけをしている。

立ち止まる。バナナの皮が落ちている。拾う。

友明「……！」



しあわせ犬がいる。

友明「お前はいったい、どうして迷い込んできたんだ？」

しあわせ犬かけだし、控室に入る。

友明もそのあとを追いかける。

#47 B 雑貨店「クミコハウス」、従業員控え室、店内

犬、控室で暴れゴミ箱を倒す。ミルクの描いたPOPが床に散らばる。

友明「俺に幸せは必要ないからこれ以上仕事を増やさないでくれ」

犬、穴の中に入りこむ。尻尾がみえる。

友明「そんなところに入るな。出て来い」

控え室のドアがいきなり開き、クミコ店長が入ってくる。

クミコ店長「なにが出てくるの？」

友明「……まだいらっしゃったんですか？」

クミコ店長「忘れもの。犬臭くない？ 今日そんなお客様いたっけ？」

友明「さあ……僕がお店に出ることないんで」

クミコ店長「……あんたうちの清掃員なんだよね。それでお金もらってるんだよね」

友明「ええ……」

クミコ店長「最近、手、抜いてるでしょ」

クミコ店長の後ろ、犬が顔を出す。

友明「……！」

クミコ店長「清潔感っていうのはね、従業員が店の事を、どれだけ思っているかってことを表してるの。店員が愛していない店を、お客様は絶対に好きにならないの。もっと心をこめて床をふいて」

友明「あ……は、はい」

クミコ店長「じゃあね。お疲れ……やっぱり犬臭い」

控え室から出て行くクミコ店長。

店を出る「カランカラン」という音。(統一させる)

友明「(店内を覗き出て行ったことを確認する)あぶねえ……」

犬の入っていった隙間を開ける。  
犬はいない。  
店内に犬を探す友明。

友明「あれ？」

倒れたゴミ箱を見つける。

見ると美しいイラスト。

裏がえすとパラパラまんがになっている。クミコ店長が殴られる絵。最後のコマには「超ウザイ」。思わず笑う友明。

友明、華やかに飾られたミルク専用デスクに気づく。机の上には制作中のPOP広告。それを見て、

友明「へえ……」

# 48 同、朝

出勤してきたミルク。

机の上に「POP制作担当の人へ」と書かれた紙袋が置いてある。

中をあけてみる。

捨てたはずのPOP広告と手紙。ミルク、それを読む。

友明の声「作り手の思いのこもった絵を久しぶりに見ました。捨てるなんて君の作品がかわいそうだよ。追伸パラパラまんがにはウケました。あいつ超ウザイよね」

# 49 同、深夜

友明、ミルクからの手紙を見て、微笑んでいる。

ミルクの声「私、なにをやっても失敗ばかり。役に立たないダメ猫なんです」

ダメ猫のイラスト。メガネをかけている。

デスクに張ってあるプリクラ。メガネのミルクと恵梨香が写っている。

# 50 同、朝

ミルク、自分の机に紙を貼る。「ドント・ウォリー・ビー・ハッ  
ピー」の文字と下手な犬のイラスト。

**友明の声**「ドント・ウォリー・ビー・ハッピー」

ミルク、それを眺めてくすりと笑う。

ミルク「ヘタすぎ！」

笑顔。力を取り戻したミルク。

# 51 欠番

# 51 B ミルクの部屋

ミルクのイメージチェンジ。

メガネを外す。

コンタクトをつける。

口紅を塗る。

鏡の前で洋服を当てる。

# 52 道

気取って歩くミルク。

ショウ・ウインドウに映った自分の姿に見とれる。

ミルク「やればできる」

# 53 イメージ

ビルに掲げられている大きな広告。(合成で)

「いい女」になったミルクの写真。

『やればできる』牛乳予備校 受験生募集」の文字。

# 54 ミルクの部屋

新海にチケットが当たったことを知らせようとしているミルク。

手紙を書くミルク。気づく。

ミルク「筆跡で私が書いたってばれるじゃん」

後ろ向きでゴミ箱に投げる。見事に入る。

\* \* \* \*

パソコンで招待状を書いているミルク。

気づく。

ミルク「プリンタ持っていないし」

考える。

ミルク「もうあの手しか残っていない」

\* \* \* \*

手袋をはめるミルク。

はさみとのり。

ミルク「できた」

新聞紙を切り張りしてできた招待状。まるで昭和の脅迫状のよう。

ミルクのヴォイスオーバー「おめでとございます。抽選の結果一等が当たりました」

# 55 新海のマンション。エントランス。ポストの前

マンションのエントランスに入っていくミルク。

ミルク、新海の新聞受けの中に投函して走り去る。

# 56 新海のマンションの近くの道

うきうきしながら歩くミルク。

香乃が立っているが気づかずに追い抜いていく。

何かを見つけて立ち止まるミルク。

前から新海が歩いてくる。スーツ姿で疲れた足を引きずるように。就職活動の帰りなのだ。

ネクタイを緩める。

どうしていいかわからないミルク。

ミルク「マジ！」

# 57 イメージ 岩場に打ち寄せる波。(江の島岩屋)

# 58 砂浜(ミルクの妄想)

笑いながら走る水着姿のミルクと新海。

新海「ミルク、おいで」

ミルク「新海くん、私幸せよ」

\* \* \* \*

バレーボールで遊ぶ二人。

最初は遊びだったのが徐々に熱を帯びていく。

新海「そろそろ、本気出しちゃうぞ」

ミルク「さあ来い、新海」

新海、思い切りスパイク。

飛びついて受けるミルク。

トス、トス、スパイク。

新海、飛びつくが追いつかない。

激しくガッツポーズするミルク。うなだれる新海。

\* \* \* \*

座って海を見つめる二人。

新海、立ちあがる。

新海「ミルク。一つだけショックなことを言わなくちゃいけないんだ」

ミルク「どんなことでも正直に話して、新海くん」

新海「埼玉には……海がないんだよ」

ミルク、波打ち際まで走っていき振り返る。

ミルク「新海くんと一緒だったら……たとえ海がなくても……私絶対負けない

から！」

見つめあいながら近寄っていく二人。

# 59 新海のマンションの近くの道

ミルク「……しんかいくん」

うつとりしているミルク。

近づいてくる新海。

ミルク「マジで来るの！」

現実に戻るミルク。焦る。

ミルク「本当に来なくていいよ！」

新海、何かに気づく。

ミルク、逃げようとして近くの塀に足をかけると排水管が取れてしまう。あわてて元の場所にはめようとしたら煙がモクモクと立ちあがる。

新海「そんなところで何してんだよ？」

ミルク、煙の出てくる穴をお尻でふさぐ。

ミルク(蚊の鳴くような声で、緊張しながら)「新海君久しぶり、ふるさとから遠く離れた東京で、って本当は埼玉なんだけど。とにかく奇遇だね。赤い糸伝説って本当なのかしら」

新海「家の中で待ってろって言っただろ」

ミルク「家の中？ そんな、いきなり。いやん、ダメん。私結婚するまできれいな体でいなさいってお母さんから厳しくしつけられてきたの」

新海「……ただいま」

ミルク、顔を上げる。

ミルク『ただいま』って、なんてハピネス感溢れる響き！……」

ミルク、新海にむかって両手を広げる。

ミルク「おかえりなさい……あなた！」

煙があふれ出る。

新海、ミルクには気づかず横を通り過ぎていく。

ミルク「……んなわけないよね。私ってわかんないか……って振り返ったらどうなってるか、ものすごく予想できるんですけど……勇気をもって現実をちゃんと受け止めるね」

後ろを振り返る。

ミルク「おまえら！……」

新海と香乃、固く抱き合っている。

# 60 イメージ、波打ち際

波がよせ、引くと「バカ♡」の文字が現れる。(逆回転)

# 61 新海のマンションの近くの道

抱き合っている新海と香乃。

香乃「ちよつと遠回りしていいよ」

新海「いいよ」

# 62 高速道路にかかる陸橋

これから待ち受ける厳しい人生を想像し、不安に思っている。

香乃、心配そうに新海を見る。

浮かない顔の新海

香乃「……怖い？」

新海「……」

香乃「ぜつたい、なんとかなるから。……ぜつたい、産んで良かったって、

思うから……わたし、自信あるから」

だから産んでもいいでしょ。

父親になつてくれるでしょ……。

……本当は自信なんてないけど。

新海「……わかつてるよ」

香乃「……育てると、絶対かわいくなるよ」

新海「わかつてるって言うてるだろ！」

新海、香乃から目を合わせないように車を見る。

目を閉じる。あきらめなければならぬ夢の数々。

香乃の声「かわいい……もしかしてこの子『しあわせ犬』ですか？」

犬婆「そう呼んでくれる人もいるわね」

いつの間にか犬婆としあわせ犬がいる。

香乃「本物に会うの初めてなんです」

犬婆「ワンちゃん好きなの？」

香乃「大好きです。飼わせてもらえなかったけれど」

香乃、無邪気に幸せ犬とじやれる。

香乃を見つめる新海。

香乃「一つ……教えてください」

犬婆「なに？」

香乃「私も……幸せになれますか？」

犬婆「さあ、私には、わからない」

香乃「ですよね……」

新海「なろうよ！」

香乃、立ち上がり新海を見る。

香乃「……」

新海「俺たち……幸せに……なろう」

香乃、うなづく。

香乃「……幸せに……なろう」

笑い合う二人。

犬婆はいなくなっている。

### # 63 近くの道

物陰から二人を伺っているミルク。半分だけ顔を出して、

ミルク「育てるって何を育てるのよ……ウサギや亀じゃないでしょ」

走り出すミルク。

ミルク「新海君、フケツ！」

転ぶ。

ミルク「キャン！」

転がるコンタクトレンズ。

追いかけるミルク。

側溝に落ちる直前、ミルクが追いつき穴を押さえる。その風圧

でコンタクトが宙を舞う。回転しながら道路に落ちる。

ほっとするミルク。

「ワンワン」と背後から犬の鳴き声。

ミルク、振り返るとしあわせ犬が走ってくる。



ミルク「なんで犬？」

犬、ミルクの前を通り過ぎる。コンタクトを踏んでいく。  
粉々になったコンタクト。

ミルク「……………」

犬の去った方を見るが世界はぼやけている。

ミルク「……………使い捨てじゃないのよ」

## # 64 劇場

会場に貼られた舞台「おやこばからくご」のポスター。

\* \* \* \* \*

舞台上『おやこばからくご』（十代目金原亭馬生を描いた作品）  
演じている恵梨香（美濃部治子役）と夫の美濃部清役のハラダ。

「#諏訪神社 前の道く公園の中」のシーン。

舞台の恵梨香と客席のミルクとのカットバック。

走ってくる治子。清を探している。

神社の中を見る治子。

清の後ろ姿。

近寄ろうとする治子。

ハラダ（清）、ぶつぶつと一人で落語の稽古をしている。『しかえ  
し狸』（創作したもの）

ハラダ（清）「……………それから数日なに事もなく過ぎましたが、ある日の仕事帰  
りの夕暮れ神社の前を通りかかった時でした。

『喜代作さん、喜代作さん』

境内のほうから声がします。近づいてみると暗いところからぬつと狸が  
顔を出しました。

『な、な、なんだてめえ、俺を化かすつもりか』

『違うんです。あっしです。先日助けていただいたタの壺です』

『ああ、……………びっくりした。あのときのタヌ公か。もういいから俺の  
前に顔をだすな。ここだけの話俺は肝っ玉小せえんだよ』

『聞いてください。命を助けてくれたお礼がしたいんです。そうしねえ

とあつしの気がすまねえ』

『お礼だ』』

足を止める治子。

清、小話をぶつぶつ稽古している。

ハラダ(清) 『喜代作さんが気に食わねえ奴をあつしに教えてください。三人ま

ででしたらあつしが代わって復讐してみせやす』

『そりゃむかつ腹がおさまらねえやつはいくらかあげられるがなあ』

『ただし条件がありやす。決して殺さない。傷つけない。いやーな気持ち  
ちがしばらく忘れられないような悪さをあつしがしてきやす。まず誰を  
こらしめやしよう』

『まあでえっ嫌れえな奴って真っ先に思い浮かぶのは……親方だな。  
あのやろう馬鹿だの、まぬけだの、すつとこどっこいだの、人の顔見る  
と茄子呼ばわりしやがって……ああ、思い出したらまたムカムカして  
きた』……』

清、遥子に気づき振り返る。

ハラダ(清) 「……おはる」

恵梨香(治子) 「帰りましょう。晩御飯、できてますよ」

ハラダ(清) 「……俺の家族の中には、日本一の噺家と、これから日本一の噺  
家になるやつがいる。でも俺はそのどちらでもねえ……親父にはフラが  
あって、弟には色気がある。俺には何がある？ なにもねえよ」

恵梨香(治子) 「何もないことを、武器にすればいいじゃないですか」

ハラダ(清) 「……!」

恵梨香(治子) 「たしかにお父さんやキョウちゃんの噺って、ちょっと聞いただ  
けで誰が演じているのかすぐわかって、それはそれで素晴らしいんです  
けれど、あなたの落語って演者を感じさせないんです。噺家は消えてし  
まって熊さんや八つつあんや与太郎さんが本当に目の前にいるような心  
地になる。あなたは私を江戸時代に連れてってくれるんです。あなたの  
落語が好きな人、思ってる以上にたくさんいますよ。それでいいじやな  
いですか」

舞台の上で輝いている恵梨香。

それをみているミルク。

ミルクのヴォイスオーバー「なんで私、東京なんかに出てきたんだろう」

ミルクのVO「私、東京で一体何しているんだろう。……東京なんて……

東京なんて……大嫌い」

恵梨香「何度も言ってるけれど……(ミルクにむかって)ここは東京じゃなくて

サイタマなの！」

ミルク立ち上がる。

周りの観客「埼玉なんだよ」

ミルク「すみません！」

# 65 ファミリーレストラン

牧夫と佑一と恵梨香が、窓際の席に座っている。

恵梨香、牧夫に紙包みを渡す。

恵梨香「あけてみて」

牧夫「何？ これ」

恵梨香「明日のデートに着ていく物。(牧夫のジャージを指して)いつもの格好

じゃちよつとねえ」

牧夫「ダサイ？」

恵梨香「ダサイ。……ダサすぎ」

落ち込む牧夫。

恵梨香「(気を取り直して)はい、あけるあける」

牧夫、箱を開ける。

牧夫「うわっ！ ありがとう！ ほしかったんだ」

牧夫、プレゼントを出す。新しいジャージ。体の前で広げる。

恵梨香「似合う、似合う」

佑一「選んだのは恵梨香一人で、金を払ったのは俺」

恵梨香、テーブルの上に、雑誌をスクラップしたものや、手書

きのメモなど数枚の紙をならべる。

恵梨香「じゃあ牧夫くん、予習しよう。(一枚目の紙、レストラン情報のスクラ

ップ)これが食事をするところ。彼女の好みはわかんないから、和食、洋食、

中華、インドの中からむこうの意見を聞いて選んで」

牧 夫「うまそう」

恵梨香「でしょ！ もう最高だから。今度一緒に行こうね」

二枚目の紙、手書きのメモ。佑一が取って読む。

佑 一『休みの日はなにをしているんですか』『子どものころはどんな子でしたか』

恵梨香「これはポケットの中に入れておくの。場が持ちそうな話題が書いてあ

るから、会話がつまつたときにこっそり読んで。(三枚目の紙、デート・コ

ースのスクラップ)これがデート・コース。パターンAからパターンDまで

四種類考えたから、そのときの雰囲気に合わせて決めてね」

牧 夫「ホテルまで書いてある」

恵梨香「あくまでも、万が一の時ね。(調子に乗るなよ、と警告をするように)

基本的には十時前に、ちゃんとお家に送り届けるのよ」

牧 夫「俺、本当にデートするんだな。実感わいてきたよ」

恵梨香「緊張するよね。……なんかすんごい緊張してきた」

佑 一「お前のデートじゃねーっつーの。(席を立ち牧夫に)なあ」

佑一、トイレに去っていく。

牧夫、恵梨香からもらった紙を熱心に見ている。

恵梨香、牧夫をみている。

牧 夫「あの子誘ったとき心臓が飛び出しそうになってさ、あんな思い二度と  
したくないと思ったよ」

恵梨香「……」

牧 夫「本当のことというと、明日もすごく怖いんだ。心のどっかでどうせダメ  
になるんだろうとか、俺のこと好きになつてくれる女の子なんかいるわけ  
ないだろうとか」

恵梨香「うん、怖いよね。……もしも少しだけ勇気を出すことができれば、き

つと世界はかわるんだよ。牧夫くんがどんな人なのか、ちゃんと伝えるこ

とができたなら、彼女も牧夫くんのこと好きになつてくれる」

牧 夫「……」

恵梨香「いい人だから。心のきれいな人だから」

牧 夫「そんな、おおげさだよ。俺なんかだめだよ」

恵梨香「じゃあね、恵梨香が、念力おくってあげる」

恵梨香、両手で牧夫の顔を抱え、自分のおでこ彼ののおでこをくつつける。

恵梨香「子供の頃ね、こうやっていつも、パパがしてくれたの。『百点取れるぞ』とか言って」

牧 夫「それで取れたの？ 百点」

恵梨香(おでこを離して)「あたしが？……取れるわけないじゃん」

牧 夫「……だめじゃん」

恵梨香「……だめかもね」

いたずらっぽく笑う恵梨香。

笑う牧夫。

笑う二人。

恵梨香、再び牧夫の顔を抱え、おでことおでこをくつつける。

恵梨香「恵梨香ね、牧夫くんのこと大好き。絶対いい娘に会えるから。絶対幸せになれるから」

目を閉じる恵梨香。

目を閉じる牧夫。

やさしさを感じあって……。

窓の外、電車が止まる。車内に由美がいる。

恵梨香、目を開けて窓の外を見る。おでこを離す。

恵梨香「……？」

電車が走り出す。

牧 夫「……！」

牧夫、茫然と電車を見送る。

# 66 欠番

# 67 駅前く駅ビル二階通路

立っている牧夫。彼女は現れない。

離れたところで恵梨香と佑一が牧夫を見つめている。

恵梨香 「恵梨香のせいだよ。恵梨香がみんな悪いんだよね」

佑一 「……いや、牧夫が悪いんだよ」

恵梨香 「ねえ、行ってあげよう」

佑一 「待ちたいんだ。納得するまで」

恵梨香 「……」

# 68 同、夕方

待ち続ける牧夫。

牧夫を見つめる恵梨香と佑一。

# 69 同、夜

待ち続ける牧夫。

牧夫を見つめる恵梨香と佑一。

終電の発車する音。駅の電気が消える。

佑一 「最初からこうなると思ってたよ」

佑一と恵梨香が近くに立っている。

牧夫 「お前ら、ずっと見てたのか。バカにしやがって」

佑一 「俺と恵梨香で考えたデート・コースにはな、お前には教えていない。パターンEっていうのがあるんだよ」

牧夫 「……」

佑一 『ふられた牧夫を俺たちがなぐさめる』。お前『ウエダマリコ』好きだったよな。ほら。(牧夫にチケットを渡そうとする)一緒に行くこうぜ」

牧夫(佑一の手を振り払いながら)「ふたりで行けばいいだろ」

佑一 「あれ？ いいのかな？ チケット屋に売っちゃうよ」

佑一、牧夫の目の前にチケットをちらつかせる。

**牧夫、急に態度を変えてチケットを奪おうとする。かわす佑一。  
ふたりのじゃれあいを見ながら嬉しそうに笑う恵梨香。**

# 69 B 夜の街

恵梨香、牧夫、佑一が笑いながら町中を駆け回る。

## # 70 道、夜

ふざけながら歩く牧夫と佑一。

恵梨香のVO「誰にも言ったことがなかったけれど……ずっと前から……  
思ってたことがあるの」

ちよつと離れたところに恵梨香。二人の中に入れない。

恵梨香「私……男の子に生まれてくればよかったな」

遠くに犬婆としあわせ犬が歩いている。曲がり角を曲がりすぐに消える。

恵梨香「あ！」

牧夫、振り返る。

牧夫「見た？」

佑一「しあわせ犬だよね」

恵梨香「触らせてもらおうよ」

佑一「行こうぜ」

走り出す三人。

牧夫、恵梨香、佑一の三人で一緒に幸福を追いかけるうちに、  
いつの間にか笑顔になる。

夜空。星がいっぱい。

## # 71 住宅地が見渡せる場所、早朝

日の出を迎え徐々に明るくなってくる街。南帆がぼんやり景色  
を見ている。

和正が現れる。

和正「いつもここに来るんだね」

南帆「あの窓の向こうにいる人たちで、どれぐらいの人が私のことを知って  
いるんだろうって考えながら……みんな今日も一日頑張れよ。……私  
は頑張ったぞって……」

和正「南帆……愛してるよ」

南帆「わかってるよ……私にぞっこんだったもんね」

和正「愛してる」

南帆「いつも優しかった」

和正「愛してる」

南帆「……幸せだったよ」

和正「愛してる」

南帆、うつむく。

南帆「私も……今でもあなたを……体が引き裂かれるほど……愛してる」

顔を上げる南帆。和正はいなくなっている。

あたりを探す南帆。

南帆「……！」

南帆の足元にしあわせ犬がじゃれついている。

犬婆「ごめんなさいね」

南帆、気にしないでください、と笑顔で首を振る。

南帆「(犬に)久しぶりだね……」

南帆、しあわせ犬をなでる。

南帆「私を幸せにしてくれるの？……でもあの人は……二度と帰ってこないんだよ」

犬婆「……」

犬を抱きしめて泣き崩れる南帆。

# 72 FM放送局「MUSASHI」、ロビー

仕事仲間との打ち合わせ。和気あいあいとした雰囲気。い

談笑している南帆。

# 73 FM放送局「MUSASHI」、スタジオ

ブースの中でしゃべっている南帆。

南帆「……行田市、ラジオネーム、カイロ団長さんからのリクエストでビル・エバンス・トリオ『Alice in Wonderland〜不思議の国のアリス』お送りしました」



ジングル。

A D「CM入りました」

前園がブースの中に入ってくる。

前園「深町さん、ちょっとすみません。チュンセポウセさんから手紙が来たんですよ」

南帆「メールじゃなくて？」

前園「次、誰になってます？」

南帆「大宮区のザネリさん」

前園「じゃあ、それと差し替えちゃってください」

ディレクター、チュンセポウセの手紙を置く。

南帆「CMあけたら、すぐチュンセポウセさんっていうことでもいいのかな？」

前園「よろしくです」

南帆「了解……」

南帆、チュンセポウセの手紙を読もうとする。

前園「(あわてて)あー、深町さん、昼の放送で新人が途中で頭飛んでパニックしちゃったんですよ」

南帆「頭、真っ白になっちゃった？ 私も昔あったよ」

前園「プロのアナウンサーたるものは、オンエアになったらどんなことがあっても放送を止めてはいけませんからね。わかってますか？」

南帆「(大げさな笑顔で)なるほど！ ひとついい？ あんた……バカ？ 私を誰だと思ってるの？」

前園「……深町さんっす」

南帆「そんなの基本のキ」

前園「謝ります。すみませんでした」

ディレクター、ブースから出て行く。

A D「CMあけます」

ブースの外ではスタッフたちが笑いをこらえている。  
キュー。

南帆「もう一通、ラジオネーム、チュンセポウセさんからです。今日は手紙でいただきました。はがきは時々あるんですけど、珍しい……温かみがあ

っていいですね。どうもありがとうございます。『こんばんは、南帆さん』  
こんばんは……なんかみたことある筆跡……」

読む。

南帆『高等部二年のときに、あなたは僕の友人だった野球部のエースにあこがれていました。僕が言いだしっぺになって、三人でライオンズの試合を見に行きましたね。覚えていますか？ あなたたちが付き合うようになって、僕はおめでとうと言いましたけれど、本当はとても悲しかったんですよ。初等部四年生のときから、僕はあなたが好きでした。』

南帆、内容のおかしさに気づき始める。

南帆『あなたたちは理想的なカップルでした。僕は彼のことも大好きでした。偉ぶったところが全然なくて、誰に対しても優しくかった。彼はいなくなっただけで、今でもあなたは彼のことが好きで、また僕も、あなたの心の中で生きている彼を消してほしくない。あなたが大事にしている美しい世界と一緒に守ってあげたい。それもまた本当の気持ちです』え？…  
…なにこれ？」

南帆、末尾を見る。

「志木市 広池耕介」と書いてある。

南帆ブースの外を見る。前園カンペを掲げる。

「ラジオを止めるな」

「あなたプロでしょ」

南帆「……ここでそれを言うか」

前園のカンペ。「さっさと進めろ」

南帆、不満げながら放送を続ける。

南帆『僕には恋人がいると、ずっとあなたに嘘をついていました。そうすればあなたが安心して、僕のそばにいてくれると思っただからです。この人なら自分に手を出さないって、そう思っていたでしょ。僕は馬鹿な男です。』

謀られたことを悟りながらも、読むことを止められない南帆。

南帆「僕は子どものころからいつでもあなたのすぐ近くについて、誰よりもあなたを理解して、あなたの幸せを心から祈っていました。あなたの嬉しそうな顔を見るのが僕の喜びだったのです。でも今は違います。僕があなた

を幸せにしたい。生まれてから死ぬまで、僕はあなた一人だけを愛して  
ます……僕と……結婚してください……深町南帆様』

南帆「広池？」

音楽が流れる。

南帆、ブースの外を見る。

スタッフたちが大喜びで拍手している。

音声スタッフ、曲の再生ボタンを押す。

A D「曲入りました」

南帆「チュンセ・ポウセさんって広池だったんだ……」

あっけにとられる南帆。やがて穏やかな笑顔。

# 74 欠番

# 75 雑貨店「クミコハウス」、売り場、レジ

ミルク、常連客とも仲良くなり笑顔を振りまいている。

# 76 雑貨店「クミコハウス」、従業員控え室、深夜

友明、ミルクからの手紙を見ている。パワーもりもり元気にな  
ったダメ猫の絵。

# 77 野原

寝転んで空を見上げる恵梨香、牧夫、佑一。

口笛の三重奏。ハモって笑顔。

# 77 B 道

新海と香乃、手をつないで歩く。

# 78 ホール近くの道

コンサートに向かう人々。

ウエダマリコのポスター。

# 79 会場高くの待ち合わせ場所

広池と由美。

由美「この後、お姉ちゃんから返事貰うんでしょ。さりげなく消えてあげるよ」

広池「怒ってるかな」

由美「怒ってるよ。めちやくちや怒ってる」

広池「…………脅かすなよ…………」

由美「決めて来いよ。今夜帰ってこなくていいから」

広池「ちゃんと帰るよ」

由美、広池のお尻を蹴とばす。

広池「痛い。何すんだよ」

由美「あ、美人が登場するよ」

南帆がやってくる。

二人に向かって大きく手を振る。

\* \* \*

佑一の携帯が鳴る。

佑一「もしもし…………あっそう。いまどこにいるの?…………」

牧夫がやってくる。

佑一「ちょうど、牧夫が来た…………じゃあ中で待ってるよ」

電話を切る。

佑一「まだ稽古場なんだって」

牧夫「ぎりぎりじゃん」

牧夫と佑一、去っていく。

# 79 B ホール 中

満員の会場。

牧夫と佑一がやってくる。

牧夫「チケットを見ながら俺は31・6だ」

佑一「俺が7で、恵梨香が8か。ここだ」

ミルクの隣に座る。

新海が来るのを待っているミルク。

近づいてくる男の足。

ドキドキするミルク。

男、ミルクの隣に座る。

ミルク「来てくれたのね、新海君。私に会いに来てくれたのね」

男答えない。

ミルク「私、新海君に謝らなくちゃいけないことがあるの。……新海君のことを疑っていた。でも赤ちゃんができたって、飼っているうさぎや亀のことなんですよ。新海君がそんなことするわけないもの。私決めたの。もう迷わない。愛を信じるわ」

隣の席で友明がきよとんとしている。

ミルク「あんた誰よ」

友明「さつきからなに一人でぶつぶつ言ってるの？」

ミルク「そこはあなたの席じゃないわ。新海君の席よ」

友明「ああ、新海からチケットもらったんだよ」

ミルク「え……そのチケットを買うために、何度あの女から怒鳴られたというの」

友明「……あんた、クミコハウスの人だよ」

ミルク「なんで知ってるのよ」

友明「ダメネコ」

ミルク「……」

F・O

\* \* \* \*

佐和子の声「うるあ」

麗愛の声「ママ」

佐和子の声「ママね、うるあのこと大好き」

麗愛の声「うるあもママが大好き」

佐和子の声「うるあだけが大好き」

佐和子と麗愛が手をつないでとぼとぼ歩いている。生活に疲れ質素な身なりの母親と、かわいい洋服を着た娘。

佐和子「明日からね、ママ、ずっとうるあと一緒にいられるよ」

麗愛「本当？」

佐和子「朝から夜までずうっと一緒。なにがしたい？」

麗愛「うーん……ママと遊ぶ」

佐和子「いいよ。……いっぱい……いっぱい……あそぼうね……」

麗愛「お仕事は？」

佐和子「お仕事は……」

麗愛「……」

佐和子「……行かなくてもいいことになっちゃったの」

電架線柱で立ち止まる麗愛。さっさと行ってしまおう佐和子。

麗愛「ママ、戻ろうよ」

佐和子「早くいらっしやい」

しばらく歩く。

佐和子。立ち止る。

麗愛、母親の手を離す。走り出す。

佐和子、動けなくなつてその場に立ちすくむ。……明日からど

うやって生きていけばいいのだろう。

佐和子「どうして、いつもあたしばっかり……」

麗愛「ママ！」

麗愛が遠くから呼ぶ。

顔をあげる佐和子。

佐和子「……」

犬婆としあわせ犬が歩いてくる。

麗愛「しあわせ犬が来たよ」

佐和子「さわらせてもらいな。いいことあるかもしれないよ」

麗愛、犬を触る。

佐和子も近くにやってくる。犬婆に挨拶もせず、麗愛ばかりを見る。

犬婆「……」

犬とじゃれる娘を見つめる母親。つらい日常の中で数少ないほっとできる時間。

犬婆「(母親に)あなた……」

話しかけられてはっとした佐和子、警戒しながら犬婆を見る。

佐和子「……」

犬婆「……いいの？」

佐和子「え？」

犬婆「あなたは、犬にさわらなくていいの？」

佐和子「私が……犬にさわる？」

犬婆「もしも、あなたがそうしたければ、犬にさわってもいいのよ」

見つめ合うふたり。

一人で神様と対峙するみずぼらしい女。

佐和子「私は……」

犬婆「……」

佐和子「……もう幸せだから」

私には麗愛がいる。

それ以外のすべてのことを犠牲にしても構わない。

犬婆「……」

麗愛が駆けてくる。佐和子の胸に飛び込む。

佐和子、麗愛を抱きしめる。

麗愛「帰ろう、ママ」

佐和子「帰ろう……麗愛」

去っていく佐和子と麗愛。

恵梨香があわてて走ってくる。

恵梨香「こんにちは……」

犬婆「こんにちは」

恵梨香「(一瞬立ち止り)ちよっとなでなでさせて」

恵梨香、犬に触れる。

恵梨香 「間に合いますように」

犬 婆 「急ぎなさい。大切な人を待たせているんですよ」

恵梨香 「さよなら」

走り去っていく恵梨香。

手をつないで歩いていく佐和子と麗愛。

犬 婆 「……」

見送る犬婆。

その後ろに黒い服を着たハラダが立っている。

目で合図した後、ハラダは佐和子の後を歩き出す。

\* \* \*

手をつないで歩いていく佐和子と麗愛。

走る恵梨香。

その後ろを歩くハラダ。

# 81 道

歩いていく犬婆としあわせ犬。

エンドロール流れて。